

アクションプランがもたらした図書館の変化
—アクションプランの策定から実施状況まで—

泉 浩, 草薙康城

愛媛県立医療技術大学紀要 第15巻 第1号抜粋

2018年12月

アクションプランがもたらした図書館の変化 —アクションプランの策定から実施状況まで—

泉 浩*, 草薙康城*

Changes in libraries brought by Action Plan Formulation of action plan to implementation status

Hiroshi IZUMI, Yasuki KUSANAGI

Keywords : 大学図書館 看護図書館 アクションプラン 図書館改革

序 文

大学図書館は、教育スタイルの変化に呼応し求められる役割が変化している。効果的なアクティブラーニングを実現するため、電子コンテンツの利用促進、講義のデジタルアーカイブ化、ラーニングコモンズの整備、学習を支援する専門職員の育成、教育面での図書館の積極的な関与、組織間の連携による学術情報の共有化など¹⁾、ICTを積極的に活用した新しい図書館像が求められている。

愛媛県立医療技術大学図書館でも従来の図書館運営からの転換を図る必要性を感じ、平成27年3月に「愛媛県立医療技術大学図書館アクションプラン 医療に携わる人の育成と研究をサポートする図書館²⁾ (以下、アクションプラン)」を策定した。

アクションプランの特徴は、「公立大学法人愛媛県医療技術大学第2期中期計画³⁾ (以下、中期計画)」との整合性を保持するため、中期計画と終了年度を揃える形で実施期間を8年間の長期間で設定したこと、「医療に携わる人の育成と研究をサポートする図書館」を図書館のミッションとして定め、5つの柱を設定し図書館の目指すべき方向性を示したこと、年度別事業計画を設定し年度毎の重点事業を示したことである。

本稿では、アクションプランの概要及び工夫点、アクションプランの設定期間の半期を経過したこれまでの実

施状況について反省点を含め報告する。

アクションプランの概要

アクションプランは、図書館の進むべき方向性を定め、限りある人的資源と予算を有効に活用しアウトカムを高める目的で、図書館職員、教員、事務職員で構成される図書・学術委員会で策定した。今後の事業計画を明文化することは、図書館に関係する教職員の共通理解につながり、新規事業をはじめとする各事業推進のための協力や理解を得ることが容易になると考える。

アクションプランは、図書館が目指す簡潔明瞭なミッションを提示し、ミッションを実現するための目標として5つの柱を設定し、5つの柱の下に具体的な取り組みという構成とした。この「ミッション」-「5つの柱」-「具体的な取り組み」のツリー構造にしたのは、アクションプランの視認性や一覧性を高めることを狙ったためである。具体的な取り組みを年度別に定め、準備期間や重点実施期間を設定した。

実施状況の検証及び内容の見直しを年度末に行い、必要に応じアクションプランを改訂することとした。長期間の計画のため、社会状況が変化し時代に適合しなくなった取り組みや予定よりも早く実施できた取り組みもあり、毎年小幅な改訂を実施している。

*愛媛県立医療技術大学図書館

アクションプランの特徴

1 明確なミッションと5つの柱

先駆的な取り組みを次々と実施し注目されている図書館に鳥取県立図書館がある。鳥取県立図書館は、平成18年に6つの柱を中心とした「鳥取県立図書館の目指す図書館像⁴⁾ (以下、図書館像)」を策定し、平成19年には図書館像を実現するため具体的な施策を盛り込んだ「鳥取県立図書館の目指す図書館像アクションプラン⁵⁾」を策定した。アクションプランを策定するにあたり、「鳥取県立図書館の目指す図書館像アクションプラン」を参考とした。

本学は、専門的な学識・技術をもつ医療専門職である看護師・保健師・助産師・臨床検査技師を育成する教育機関であり、本学の教育目標を達成するために必要な図書館の使命として「医療に携わる人の育成と研究をサポートする図書館」をミッションとして定めた。教職員や学生は勿論のこと、現役の医療職の方、これから医療の道を目指す方にも図書館として支援することで医療技術の向上に役に立ち、県民の生活向上に寄与したいとの思いから、サービス対象を学外者にまで広げている。

ミッションを実現するため、

- 1 学習環境を整備します
- 2 研究活動を支援します
- 3 読書推進を目指します
- 4 社会へ貢献します
- 5 他の図書館等との連携を推進します

を5つの柱とした。

「学習環境を整備します」では、主に学生が利用しやすい図書館を目指し館内整備に取り組み、「研究活動を支援します」では、主に教員・大学院生の研究に資する図書館を目指し資料の充実を図り、「読書推進を目指します」では、学生の読書量を増やし図書館の利用頻度を高め、「社会へ貢献します」では、情報発信の強化と学外の方の利便性を向上させ、「他の図書館等との連携を推進します」では、大学図書館や公共図書館、病院図書室等との連携を強化し、相乗効果を生み出せる事業展開を目指すこととした。

2 現状・課題

図書館として何が足りないのか、これから必要とされる図書館サービスとは何か等現状や課題を表面化し、効果的な取り組みに結び付けるため、現状分析を試みた。本学は学生1人当たりの年間資料貸出数が30冊前後とアクションプラン策定当時には、すでに多くの学生が図書館を利用していた。利用が多いにも関わらず資料紛失数が年間10冊にも満たない年が多く、利用者のモラルが高く、図書館の管理もよい等、誇るべき面も多々あった。

しかし、課題を克服し便利で役に立つ図書館を目指すという命題を優先させるために、5つの柱の1つである「読書推進を目指します」の「現状・課題」では、「学生1人当たりの年間貸出数は29.2冊(平成25年度)と利用の多い図書館ですが、学生はレポートや論文等の課題解決のために本を借りることが多く、読書量は多いとは言えません。また読書を喚起するような資料も多くありません。ブックハンティング以外に学生が図書館運営に関わる機会が少なく、学生の声が届きにくくなっています。」といったネガティブな表現を多く用いた。結果が出ていることに関しても、それに満足することなくもっと図書館を良くしたいという気持ちの現れを反映させた。

3 具体的な取り組み

アクションプランの事業はすべて実施するという意志を持って、5つの柱の下に「具体的な取り組み(以下、取り組み)」を記載した。柱毎の取り組みの数は、「学習環境を整備します」では、「ラーニングコモンズの設置」など12項目、「研究活動を支援します」では、「選書方法の見直し」など6項目、「読書推進を目指します」では、「学生サポーター制の導入」など9項目、「社会へ貢献します」では、「インセンティブにより機関リポジトリの掲載文献の増加」など6項目、「他の図書館等との連携を推進します」では、「県内の大学図書館との連携強化」など8項目の計41項目となった。アクションプラン施行前に既に実施中の取り組みもあったが、取り組みの多くは新規事業を設定したため、アクションプラン策定時には大判風呂敷を広がたすぎとの懸念もあった。5つの柱の取り組みの数は、特定の柱に偏りすぎないようにバランスを考えて振り分けている。

具体的な取り組みに簡単な説明を付記し、図書館が何をやるようとしているかについて、アクションプランを見た誰もが分かるよう明確にした。「～の利便性を向上させる」や「～の充実を図る」などの抽象的な表現のみの場合、見る人によって解釈の余地が大きいため、図書館サービスの向上につながるケースが多いと感じたためである。

実現性の高い取り組みが並ぶ一方、革新性や独自性に欠けるアクションプランになることも避けたいと考え、実現性は低いチャンスがあれば実施したい取り組みも少数ではあるが加えた。

4 年度別事業計画

具体的な取り組みをいつ始めるのかを明確するため、「検討・準備期間」「重点実施期間」「継続・推進期間」の3つに分け、年度別事業計画とした。3つの期間のうち「重点実施期間」を実質的な取り組みの開始年度として設定した。

アクションプラン設定期間の8年を前期・中期・後期に分け、前期には、実現性や必要性の非常に高い取り組み、着手済みの取り組み、多くの図書館がすでに実施中の取り組み、ノウハウなどの情報を得ることが容易な取り組み、低予算または予算措置がとれている取り組み、職員負担の少ない取り組み等を、中期には、実現性がやや難しいが図書館として必要な取り組み、先駆的で独自性の高い取り組み、多くの関係者の協力や理解が必要な取り組み、予算措置が必要な取り組み、事前準備や情報収集、実施のための職員負担が大きい取り組み等を、後期には、実現性は低いチャンスがあれば実施したい取り組み、関係者の理解や協力を得るために多大な労力が必要とされる取り組み、技術的に実施が困難な取り組み、予算措置が難しい取り組み等に振り分けた。

取り組み年度を振り分ける際に注意したこととして、アクションプラン施行直後のモチベーションの高い前期に多くの取り組みを設定すると、職員の負担が大きくなり疲弊する可能性や、8年間の長期間にわたる職員のモチベーション維持の困難さを考慮し、前期・中期・後期とバランスを考え振り分けた。

5 実施状況の検証・内容見直し

年度末には、1年間の総決算としてアクションプランの実施状況を検証し、必要に応じ内容を見直すこととした。予定どおり実施できた取り組み、予定よりも早く実施できた取り組み、諸事情により実施できなかった取り組み等、アクションプランのすべての取り組みについて、反省点や改善点、評価点を検証し、次年度以降へのフィードバックにつなげることとした。

アクションプランの実施状況

1 アクションプラン実施状況の概要

平成30年12月現在、アクションプラン設定期間の半期を経過した段階で、全41の取り組み中31の取り組みで実施済みまたは実施中であり、約75%の取り組みを達成できた。取り組みによっては達成の判断基準に迷うものもあるが、図書・学術委員会での検証結果を共通理解として判断することとした。

アクションプランの実質的な初年度にあたる平成27年度末までに19の取り組み(約46%)を、平成28年度末までに24の取り組み(約59%)を、平成29年末までに30の取り組み(約73%)を実施しており、アクションプラン設定期間の前半に、ハイペースで成果を上げたといえる。これは関係部署との協力体制や調整が順調に進んだこと、必要な予算を確保できたこと、職員のモチベーションが高かったこと、実現性の高い取り組みを前期に設定したこと、他大学図書館等から情報やノウハウを聞

くことができたこと等が要因として考えられる。取り組みが順調に進んだことで、学内関係者の図書館への理解や協力にもつながり、新たな新規事業が進めやすくなるなど、好循環をもたらしている。

2 「学習環境を整えます」の実施状況

平成29年4月、モニター、ノートパソコン、プロジェクター、スクリーン兼用の大型白板を備えた小規模ながらラーニングコモンズを設置した。ラーニングコモンズは、設置当初から教員と学生あるいは学生同士の共同学習等で、非常に高い稼働率で利用されている。ラーニングコモンズは、事前予約制をとっているが、予約が重なることも少なくなく、ホームページでラーニングコモンズの空室状況をリアルタイムで公開し確認できるよう対応した。

利用しやすいレイアウトを実現するため、カウンター席を新設し居心地のよい空間を演出した。カウンター席は、机の高さ・幅、足置きバー、コンセント、目隠しフィルムの設置等、学生からも意見を聞き、快適に利用できるよう工夫を凝らしたものを設置した。

さらに別館書庫を新設し資料収納可能冊数を増やすとともに、教職員・学生・大学院生は5冊から10冊へ、学外者は3冊から5冊へと館外借出可能冊数を増やした。息抜きのできる飲食可能なラウンジスペースの設置についても検討したが、図書館が狭くスペース的に余裕がなかったため、図書館内でコップの利用を含めすべての飲料を利用できるよう対応しラウンジスペースの代用とした。

IT環境として、貸出用ノートパソコン6台、貸出用タブレット2台をカウンターに設置し整備した。利用希望者はカウンターで図書館の借出券を兼用する学生証を提示し手続きを行い、ノートパソコンは図書館外も含め3日間、タブレットは当日に限り学内のどこでも利用できる対応とし、ホームページではその貸出状況を公開した。また公衆無線LANスポット(Wi-Fiスポット)を整備し、学外者も含め私用パソコンやスマートフォンからインターネットに接続できる環境を整えた。図書館システムのバージョンアップにより、マイライブラリ及び督促メールの自動送信機能の追加、貸出期限の延長、貸出中資料の予約、検索結果画面のレイアウト変更により、ユーザビリティを向上させた。

3 「研究活動を支援します」の実施状況

図書館職員、講座単位で依頼した教員による選書に加え、非常勤講師にも選書を依頼し、リクエスト及びブックハンティングのための予算枠を新設し選書の幅を広げ、蔵書構成の弱点克服に努めた。さらに地域の医療関係機関が発行する雑誌や入手困難な雑誌のリストを作成

し、欠号等の収集に努めた。その結果、減少傾向が続いていたILLの文献複写受付件数が平成28年度から増加傾向となり（平成27年度：文献複写受付件数1,588件→平成29年度：文献複写受付件数2,105件）、ILLをとおして他大学の研究にも貢献している。

大学院開設を契機に、洋雑誌の電子ジャーナルを新たに導入し、一部のデータベースや電子ジャーナルを学外でも利用できるよう対応した。電子ブックについては、まだ本格的な導入には至っていないが、トライアルを実施するなど、情報収集に努めている。

職員の資質向上のため、臨時職員も含め、可能な限り研修に参加できる機会を増やした。しかし、常時2～3人の職員で運営する小規模図書館のため、1回の研修に2人以上の派遣が不可能な上、土曜日開館の代休や会議等との調整により、研修の機会を逃すことの多いことが課題である。

4 「読書推進を目指します」の実施状況

学生有志による図書館サポーターを結成し、図書館運営に学生の声を反映させている。図書館サポーターは、「大学図書館学生協働交流シンポジウム」に参加し他大学の図書館サポーターと情報交換を行ったことで、モチベーションが大きく向上した。図書館サポーターの活動として、ブックハンティングの実施、本の福袋の開催、図書館マスコットキャラクターの決定、ビブリオバトルの開催等を実施した。マスコットキャラクターは、公募から投票による選定方式まで図書館サポーターが取り決め、図書館はホームページでの広報等そのサポートに徹した。マスコットキャラクター決定後は、広報やグッズの作成でキャラクターを積極的に活用し、図書館のブランディングに寄与するまでになった。年2回、図書館長を含めた図書館関係者との意見交換会も行っており、多くの提案や要望が図書館サポーターから出されている。実現した提案として、閲覧用机に間仕切りの設置、閲覧用机にフックの取り付け、持ち運び用椅子の設置、荷物用バスケットの設置、貸出用ブランケットの設置、資料持ち帰り用袋の設置、手荷物置台の設置、利用の多い資料の複本を館内利用限定資料として設置等、図書館職員が見逃しがちな利用者目線での意見が多く、これらの提案は大変好評を博している。図書館主催のイベントで図書館サポーターに手伝ってもらうこともあり、図書館サポーターは図書館として不可欠な存在となった。図書館サポーターの活動により、学生と図書館との距離が一気に縮まり、図書館を良くしたいという共通の願いから、想定を大きく上回る効果をもたらした。図書館サポーターの結成は、アクションプラン全事業の中で最も評価できる取り組みといえる。

読書を喚起するため、図書館内にリクエストブック

ス、ホームページにリクエストフォームを設置した結果、文学や医療関係専門書のリクエスト数が大きく増加した。読書が苦手な利用者にも図書館を気軽に利用してもらうため、「医療マンガ・絵本」「旅行案内」のコーナーを設置した。ホームページはユーザビリティを意識し全面的に刷新し、コンテンツも充実させ、情報量を大幅に増やした。SNSを使った広報も積極的に行なっており、ささやかな情報でも可能な限り発信するよう努めている。

展示関係では、時事的なテーマの展示、医療に関する展示、授業と連携した展示をガラスケースやブックトラック、テーブルを利用し大小様々な方法で常時実施している。他大学図書館との連携による交換展示会も毎年開催し、通算4回実施した。学生祭での企画展示として、「東日本大震災写真展」をアクションプラン施行前から通算5回開催した後、絵本作家の丹治匠氏、長野ヒデ子氏の絵本原画展（長野ヒデ子氏は講演会も同時実施）を開催し、地域の住民サービスにもつなげている。

5 「社会へ貢献します」の実施状況

セキュリティ及び人員体制を整え、学内者のみ利用できた土曜日・平日夜間の図書館利用を学外者も利用できる体制とした。学外者の館外借出可能冊数を3冊から5冊へ増やすとともに利用カードの更hands続きの簡素化、ウォークインユーザーとして利用可能な電子リソースを学外者も利用できるよう整備した。図書館へ足を運ぶことが難しい学外の方や、長期休業中に実家等で図書館資料を利用したい学生や教職員のために、往復送料利用者負担による「図書館資料宅配サービス」を開始し、サービス拡充を図った。

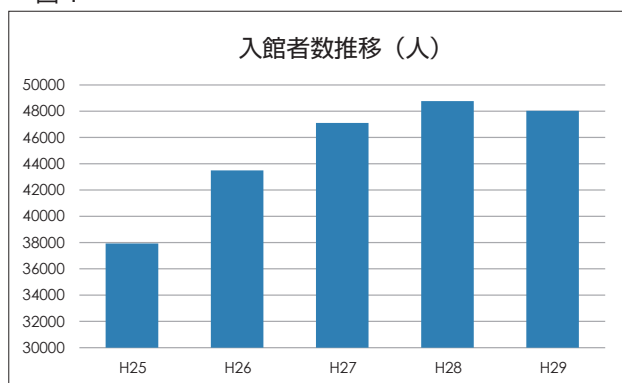
アクションプランの取り組みではないが、県内の医療に関する記事見出しを検索できる「愛媛新聞記事見出し検索」を図書館職員の手作りによるデータベースとしてホームページで公開し、医療情報の提供に努めている。少人数で運営する図書館のため、データのチェック機能は十分とは言えないが、データの不備が見つかった場合はその都度修正する方針で、日々データを蓄積し利用に供している。大学の授業が終わり閑散期となる夏期休業期間には、中高生向け閲覧席開放サービスを行い、地域の若い人たちの自学自習を支援した。

6 「他の図書館等との連携を推進します」の実施状況

公共図書館と連携し「東日本大震災写真展」の巡回展を行ったほか、他大学図書館との共同企画として交換展示会を毎年実施している。

他の図書館等との連携を推進するため、地元の公共図書館、大学図書館、病院図書室、看護協会図書室に出向き情報交換及を行っているが、いずれの図書館とも踏み

図 1



込んだ連携協力体制の構築までには至っていない。他の図書館等との連携は、意思決定に関わる人数が多くなるうえ、図書館の使命やサービス対象も異なり、予算等利害も絡むことから、多くの時間や問題点を解決するための根気があることを痛感する。急がず焦らずじっくりと取り組む必要性を感じている。

アクションプランの効果

アクションプランの実施後の平成29年度の各種統計は、入館者数が48,028人(平成26年度比10.4%増)、館外借出冊数が16,048冊(平成26年度比19.3%増)と年度により上下するものの順調に推移している。資料の予約数は62冊(平成26年度比3.9倍)、リクエスト数は112冊(平成26年度比7.5倍)、ノートパソコン貸出数は826件(平成26年度比2.1倍)と大幅に増え、これまで顕在化しなかった利用者ニーズを掘り起こしたと言える。ラーニング commons の利用人数やデータベース、電子ジャーナルの利用数も伸びており、各サービスの利用が順調に増加している。一方複写の利用は減っているが、これは紙媒体の資料から電子資料に利用がシフトしていることが原因として考えられる。ILLの文献複写受付数は減少傾向が続いていたが、平成27年度を底に反転増加した。

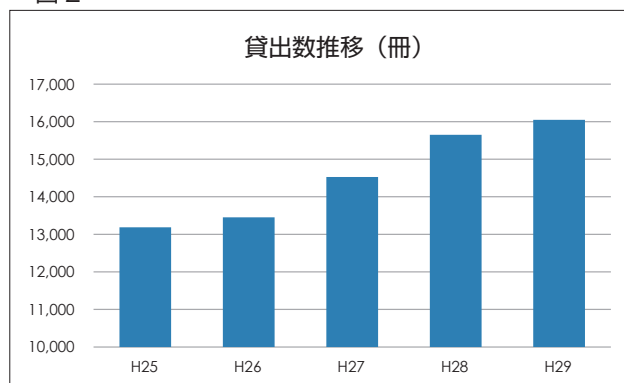
結 語

アクションプランは立派な計画を立てても、実行者の熱意がなければ机上の空論になりかねない繊細なものである。

計画段階では、人員も予算も見通しが立たないため、実現性が高いものの創造性や革新性に欠ける計画や、実現不可能な夢物語のファンタジー計画になる危険性ははらんでおり、その匙加減が難しい。

アクションプラン施行後は、新規事業を実現するために多大な労力やモチベーションの維持が必要であり、強い意志が求められる。時には関係者と衝突することもあ

図 2



り、人間関係も重要になる。

本学は図書館を取り巻く図書館職員、図書・学術委員会の教職員、図書館サポーター等多くの方の協力を得ることができ、これまで順調に成果を上げることができた。また、本学のような小規模図書館だからこそ改革が順調に進んだとも言える。個人の熱意が相対的に図書館全体の熱意の総量に占めるウェートが高く、新規事業に欠かせない説得・調整が必要な対象者が相対的に少なく済んだことが大きい。

アクションプラン実施期間はまだ半分残っており、これまでの取り組みのさらなる深化と、未着手の取り組みの実現に向けて気を引き締めたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 (19/01/13) : 学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議まとめ) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm
- 2) 愛媛県立医療技術大学図書館 (19/01/13) : 愛媛県立医療技術大学図書館アクションプラン 医療に携わる人の育成と研究をサポートする図書館 平成30年4月改訂版 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338889_1.pdf
- 3) 愛媛県医療技術大学 (19/01/13) : 公立大学法人愛媛県医療技術大学第2期中期計画 <http://www.epu.ac.jp/library/etc/a39a5fa156f542ddde8d0c75dcd01d7b.pdf>
- 4) 鳥取県立図書館 (19/01/13) : 鳥取県立図書館の目指す図書館像 <http://www.library.pref.tottori.jp/about/18-tosyokan-zou.pdf>
- 5) 鳥取県立図書館 (19/01/13) : 鳥取県立図書館の目指す図書館像アクションプラン <http://www.epu.ac.jp/about/johokokai/file/77321fccc4410e4c1d72df9760ca7add.pdf>

要 旨

図書館の進むべき方向性を定め、限りある人的資源と予算を有効に活用しアウトカムを高める目的で、平成27年3月「愛媛県立医療技術大学図書館アクションプラン 医療に携わる人の育成と研究をサポートする図書館」を策定した。

アクションプランは図書館のミッション及び5つの柱を中心に、計41項目の取り組みを年度別事業計画として具体的に記載し、見る人によって解釈の余地を残さないよう工夫した。アクションプランの設定期間8年間の半期を経過した時点で、41の取り組み中31の取り組みで実施済みまたは実施中であり、約75%の取り組みを達成できた。アクションプランにより図書館活動が大いに活性化した。

利益相反

本報告における利益相反はない。